

神田外語大学紀要第 29 号
抜刷 2017 年

The Journal of Kanda University of International Studies Vol. 29 (2017)

日本におけるインドネシア語教育の先駆者
－宮武正道の辞典に関する考察－

舟 田 京 子 工 藤 尚 子

日本におけるインドネシア語教育の先駆者 —宮武正道の辞典に関する考察—

舟田 京子 工藤 尚子

Abstract

Seido Miyatake (1912-1944) was a pioneer of Indonesian language study in Japan before and during the Pacific War. Although he was an excellent linguist who did not belong to any academic institution, he compiled both the first Japanese-Indonesian dictionary, and the most comprehensive Indonesian-Japanese dictionary in the world. As this was made before Indonesia's independence, the language of these dictionaries was still neither developed nor reflective of the modernized conditions seen after the war.

This paper focuses on three points. First, his activities as an Indonesian linguist with respect to Indonesian language is discussed. Second, the strength of his Indonesian-Malay dictionary is explained. Thirdly, a hypothetical analysis of the strength of his dictionary i.e. new words is made in comparison with the words today.

1 はじめに

宮武正道 (1912-1944) は、戦前、戦中のインドネシア語¹の前身であるマレー語の教育・研究において、先駆的な役割を果たした。マレー語と言っても現在のマレーシアに相当するマレー半島におけるものと、現在のインドネシアに当たるオランダ領東インドにおけるマレー語のうち、宮武が著した辞典はインドネシアのものである。日本におけるインドネシア語研究のパイオニアでありながら、宮武に関する先行研究は数少ない。²とくに彼のインドネシア語教育・研究に関する文献はほとんどないといえる。³

彼は、日本で初めての日本語・インドネシア語辞典ならびに当時世界最大語数を擁した『標準馬來語大辞典』(以下、『大辞典』と略す)⁴を藺田頭家編纂主任とともに編集した。宮武のインドネシア語研究の集大成といえる『大辞典』は1943年7月に刊行されたが、この時期は日本によるインドネシア占領期(1942年3月～1945年8月)であり、日本人のインドネシア語学習熱が非常に高かった。この辞典も元は松岡洋右外務大臣からの依頼ではあったが、宮武のインドネシア語研究に対する思いは、政治的ではなく純粋に語学に対する興味からであった。⁵生涯

¹ 1920年代の民族主義の高揚のなかで、「インドネシア青年会議」は、28年「われらインドネシア人は唯一の言語インドネシア語をもつ」ことを決議の一部とする「青年の誓い」を採択した。インドネシアは1945年8月17日にインドネシア共和国の独立宣言を発し、「1945年憲法」も制定した。その第36条でインドネシア語を「国語」とすることを規定した。それ以前はマレー語(マライ語、馬來語、ムラユ語とも表す)であったが、本論文ではインドネシア語と記す。ただし辞典の名称や引用はそのまま使用した。また、現在のマレーシア、インドネシアの両国にわたる範囲で使われていた意味合いの場合などは、マレー語等と表記する。

² 先行研究として、黒岩康博「宮武正道の『語学道楽』—趣味人と帝国日本』『史林』94(1)、2011年、pp.125-153。

³ 先行研究としては次のとおり。James T. Collins, “Exploring medical terminology in Miyatake’s Malay-Japanese dictionary (1943),” paper presented in the panel “Medicine Talks: Perceiving Society and Individuals in Japanese Occupied Singapore and Indonesia,” AAS-in-Asia Conference 2016, Doshisha University, June 26, 2016; 黒岩康博「宮武正道宛軍事郵便—インドネシア派遣兵士と言語研究者—」『天理大学学報』66(1)、pp.103-122、2014年。Yasuhiro Kuroiwa, “Military Mail for a Linguist: Soldiers Who Support and Profit from the Language Studies of Masamichi Miyatake”, *ZINBUN* 43(2012), pp.35-50.

⁴ John M. Echols, “Dictionaries and Dictionary Making: Malay and Indonesian”, *The Journal of Asian Studies* vol.38, 1978, p.19.

⁵ 2016年8月1日、奈良県奈良市内における宮武テラス氏のインタビューによる。

でインドネシアへ行ったのは、19歳のときジャワ島およびスラウェシ（当時はセレベス）島へ一度だけであった。「一冊でも多くの本を書き、より完全な辞書を残しておきたい。せめて自分の年齢の数だけは本を書いておく、ゆっくりしてられん」⁶と、33年という短い生涯を早馬のように駆け抜けた。「性格は（中略）馬鹿正直と笑われていたようです。商売の話は一切無用、損得は問題外、家計つきあいは無関心、ただマレー語一と筋に生き抜いた」。⁷大学の職を求めず、一民間人として在野にありながら、インドネシア語教育・研究に生涯を捧げ、30冊以上もの著作を残した。

本論文執筆の動機は、まず筆者が宮武の愚直な性格とインドネシア語の業績に興味を抱くようになったことである。次に宮武がインドネシア語に対してどのような思いを持って研究を続けたのか、さらに彼が作った辞典はどのようなものであったのかということである。本論ではまず宮武のインドネシア語観について述べる。そして彼が残したインドネシア語辞典のうち『大辞典』の草稿ノートと推定されるものを閲覧することができたので、このノートと『大辞典』との照合ならびに、この『大辞典』の特徴である新語について考察を行う。

2 宮武正道とインドネシア語

2-1 日本におけるインドネシア語学習状況

宮武の生年と前後して1908年は、東京外国語大学の前身、東京外国語学校に東洋語速成科馬來語学科が開設された年であり、また、明治時代以降日本最初のインドネシア語に関する文献であると思われる、阪田政次郎著『馬日対照南洋語彙』が出版された年である。また、翌年1909年には、バタヴィア（現在のジャカルタ）に日本領事館が開設された。そして1913年は、バタヴィアに日本人会が誕生している。1922年には大阪外国語大学（現在の大阪大学）の前身である大阪外

⁶ 宮武タツエ編『宮武正道 追想』、1993年、p.19。

⁷ 同上、pp.17-18。

国語学校が、さらに1925年には天理大学の前身、天理外国語学校が創設された。

インドネシアは、太平洋戦争中の日本軍政によって1942年3月～1945年8月に占領され、日本におけるインドネシア語教育が最も発展する。インドネシア語辞典・学習書の出版数は、この間著しく伸びている。⁸

2-2 宮武のインドネシア語観

宮武は、奈良県師範学校附属小学校、奈良県立奈良中学校を経て、天理外国語学校馬来語部で学んだ。17歳のときに、これから本格的に外国語を学んでいくとすれば、国際共通語としてエスペラント語を学ぶべきだと結論づけているが、世界共通語について次のように記している。この中で国際語として何を学ぶべきかの問いには、日本語、英語、インドネシア語、中国語、アラビア語を挙げており、すでにインドネシア語が国際語であるとの認識を示している。

新しい時代が来ました。交通機関の整備とラヂオの発達に伴って世界は日々に縮小して行きます。我々は期せずして世界文化の中に生き、日常生活はいつしか国際的となつてゐるのであります。

かゝる時代において、世界共通国際の必要なるは申すまでもありません。ここに言ふ国際語とは、世界の言葉を統一する意味のものでなく、日本人は日本語とその国際語とを學び、ドイツ人はドイツ語の他に国際語を學ぶ、すると兩國人が話をする場合にはその国際語で語り合ふと言つたもので「自國人は自國語で、外國人とは国際共通語を」といふ標語のもとに適用されるべきものであります。

然らば、世界共通語として何を学ぶべきか、日本語か、英語か、マレー語か、支那語か、それともアラビヤ（ママ、以下同様）語か。

⁸ 工藤尚子「日本におけるインドネシア語教育の発展—文化交流史の視点から」『語研フォーラム』、2002年、pp.69、71-73。

国際語たるものは、国際裁判所と同じく、絶対に中立でなければなりません。而して平易簡明、正確、緻密、といふをが必要条件であります。⁹

宮武はそもそも「奈良中学在学当時からエキゾチックな事物に対して非常な憧れを抱いていた」。¹⁰その第一歩として郵便切手の収集、続いて絵はがきのコレクション、その次が、エスペラント語の研究である。さらにパラオ語の研究をし、アラビア語をかじり、ドイツ語の講習会に顔を出す。そして天理外国語学校馬來語部在学中に、ついに南洋旅行でスラウェシとジャワに行った。¹¹上記のほかにもミナンカバウ語、ジャワ語、パタック語、そしてタガログ語を学び、¹²他界した際にはタガログ語の辞典編纂に取りかかっていた。¹³

「ジャワで日本人資本のマライ語の新聞社を始めたい」¹⁴との念願は、病気のためあきらめ、その後は自宅でペンションをやり海外の人たちと交流したいと家族に語っていたという。¹⁵インドネシアの新聞へ寄稿をしていたが、それは、ジャワ島を訪れた際に、*Bintang Timoer* 紙のパラダ・ハラハブと知り合い、¹⁶在日通信員となったためである。¹⁷辞典や学習書の他にも、現地の新聞 *Sinar Sumatra*、*Dagblad Radio*、*Soeara Oemoem*、*Pemandangan*、*Sinar Selatan* に宮武の記事は掲載されていた。¹⁸

宮武は、インドネシア語の専門家として知られているが、ほかにもエスペラン

⁹ 奈良エス会員 ミヤタケ マサミチ「国際語エスペラント」『奈良時報』、1929年11月5日。

¹⁰ 宮武正道『瓜（ママ）哇見聞記』、1932年、自序。

¹¹ 同上。

¹² 宮武タツエ編、前掲書所収の石濱純太郎「にぶき良心で」、p.6。

¹³ 同上。および大島襄二「タガログ語辞典草稿」『地域文化』第4・5合併号、pp.83-174、地域文化学会、1978年。

¹⁴ 宮武正道・片山貞雄共著、1944年、『インドネシア・パルー』、湯川弘文社、p.1。

¹⁵ 前記 注5のとおり、宮武テラス氏インタビューによる。

¹⁶ 宮武正道・片山貞雄共著、前掲書、p.1。

¹⁷ 北村信昭「奈良エスペラント学事始—マレー語の宮武正道氏とその周辺」『奈良県観光』、1964年1月10日。

¹⁸ 宮武正道執筆記事のスクラップブックより（宮武家文書所収）。

ト語、タガログ語など16もの外国語に精通していたという。¹⁹彼のところへは外国人からいつも手紙が来ていた。また宮武自身、タイプを打ってインドネシア語の新聞に記事を送っている。こうした行動のため、警察からは注意人物として睨まれて要注意人物リストに載ることになる。特高警察がぶらりと来ては、雑談をして帰った。そして戦争に入ってから憲兵が来る。彼はこの頃、ソ連邦発行のロシア語紙『モスコニュース』、『プラウダ』の二紙を読んでいたのも、戦況を翻訳して憲兵に教えてやった。そのため憲兵は「先生、先生」と慕って遊びに来る。²⁰国民政府側の中国の新聞も読んでいたともいわれる。²¹

宮武は、奈良中学在学中に、一年間でエスペラント語をマスターする。中学時代から英語で書かれたアラビア語の文法書を読み始め、アラビア語の動詞変化表も作った。当時大阪外語学校にもアラビア語科はなく、同校の松本重彦教授がインド科やマレー科の学生にアラビア語を少し教えていた程度である。宮武は学習するつもりでいたが、教授は既に京城帝国大学へ転動していた。中学を終えると、ラジオ学校へ入る。しかし興味がもてないので、天理外語馬来語科に入学した。²²

それでは、なぜアラビア語からインドネシア語に興味を移したのであろうか。現在のインドネシア語はローマ字綴りで表記されているが、イスラム教の普及に伴い14世紀頃からアラビア文字が使われた。これはアラビア文字とそれでは表記できない若干のインドネシア語の音に当てるため、本来のアラビア文字を少し変形させ表現したもので、これをジャウィ文字という。また、インドネシア語にはアラビア語からの借用語も多い。この点において、アラビア語からインドネシア語への関心が移るのも、十分な理由がある。

またアラビア語とインドネシア語の関係性は、「共通語」「国際語」である点で

¹⁹ 前記 注5のとおり、宮武テラス氏インタビューによる。

²⁰ 宮武タツエ編 前掲書、はじめに。

²¹ 「現地が一番役に立った宮武馬来語」『奈良県観光』、1964年1月10日。

²² 『大和百年の歩み 社会・人物編』、大和タイムス社、1972年、pp.649-650。

も類似している。アラビア語は、世界で3番目に多くの国と地域で使用されている言語である。インドネシアは世界最大の島嶼国家であり、そこに多数の民族がおり、各民族が用いる地方語の数は200を超えるといわれている。この民族間の共通語がインドネシア語である。

上記のインドネシア語教育・研究や学習への貢献のほかにも、彼の言語に対する考え方を示すうえで、次の三点について記す。

「大東亜共栄圏」の中でも言語的に多様である東南アジアにおいて日本政府は、政策的には日本語を全体の「共通語」として設定していた。基本的には一地域一言語（その地域の固有語）プラス日本語という形態で言語教育を行おうとしていた。²³しかし宮武は、マレー語を南洋のエスペラント語と捉えており、マレー語はマレー半島、東インドにおける共通語であり、フィリピンにも共通語として採用することを主張していた。²⁴

次に、宮武はインドネシアにおける日本語について、「南方に於ける日本語の普及は南方語を知らぬ日本人の便利のためであつて、南方人に日本語を強制して日本人が南方語を勉強する手間と労を省かうと言ふのであれば、八紘一字精神が泣き出すであらう。我々の日本語普及は断じてかかる白人の植民地侵略主義的功利主義的であつてはならぬ」²⁵との考え方に立っている。そして「日本文化を吸収し得る程度にまで徹底せしめるべきであつて、決して單なる日常會語（ママ）の單語の片言を覚えさすだけで止むべきではない」²⁶という見解であつた。そして具体的な提言として、インドネシア人が漢字を覚えるのは不可能に近いので、海外向けの図書は「出来るだけ簡単な日本語を用ひ全部發音式左横書きカタカナ文」²⁷を用いるよう主張している。そのためには「さしあつて日本の文化の最高水準を

²³ 安田敏朗『帝国日本の言語編制』、世織書房、1997年、pp.294,440。

²⁴ 宮武正道『南洋の言語と文学』、湯川弘文社、1943年、p.21。

²⁵ 宮武正道「南方に於ける日本語工作の問題」『東亜文化圏』、1942年7月号、p.35。

²⁶ 同上。

²⁷ 同上、p.39。

示す各種の書籍のカナモジ版を至急に多量に出版することが必要である。(中略)もし此の工作がうまく行かぬのならば一層のこと、日本に於ける南方諸島の研究をウント盛んにして、南方語を以て日本文化を傳へる事に専念する方が賢明」²⁸であると考えていた。

第三に、マレー語の綴りには英式と蘭式があり分かりにくいとして、綴り方を統一すべきであると考えた。そのため彼は日本式ローマ字綴りを中心として、これを一部改良した大東亜式をつくり、その使用を提唱した。²⁹

これらは純粹に合理的な考え方からの提言であるが、当時の状況からは日の目を見ることはなかったのである。彼の上記の提言がかなり非現実的なものであったことは事実としても、とりわけ漢字を習得させるのは不可能であるという認識に立ち、それを押しつけるべきではなく、日本人自らがインドネシア語を学ぶべきであると断言したのは、当時勇気のいる発言であったろう。日本人であってもインドネシア人の視線に立ち、言語政策を提案したことが、宮武の時代を先取りした見識だったのではないか。

宮武正道インドネシア語関連年譜

年月日	インドネシア語関連事項等
1912年9月6日	奈良市西御門町八番屋敷、製墨業、宮武春松園八代目当主、宮武佐十郎、母・てるの長男として出生。正道（マサミチ）と命名されたが、文筆活動に入る頃には、自らセイドーと音読する。
1919年3月	奈良女子高等師範学校附属幼稚園修了
4月	奈良県師範学校附属小学校入学
1925年3月	奈良県師範学校附属小学校卒業

²⁸ 同上、p.40。

²⁹ 宮武正道 1943、前掲書、pp.107-111。

日本におけるインドネシア語教育の先駆者－宮武正道の辞典に関する考察－

4月	奈良県立奈良中学校入学
1930年3月	奈良県立奈良中学校卒業
4月	天理外国語学校馬來語部入学
1931年1月	『馬來語読本』(一)を天理外国語学校馬來語部 佐藤栄三郎教授とともに編纂。
1932年1月25日	天理外語、第三回外国語劇大会に自作の脚本「ジャバ(ママ、以下同様)の月」にヒロインである巡査の妻アンニー役として出演。
7月21日	神戸出航の南洋郵船チェリボン丸(六千トン)で単身、ジャワ、スラウェシに旅立つ。産業調査を委託された奈良市の囑託、東洋民俗博物館の囑託として視察。8月29日神戸港に帰国。
10月3日	ジャワの馬來語新聞、 <i>Bintang Timoer</i> は同日付に宮武正道を在日通信員に委嘱した旨の社報を掲載。その第一回通信を同紙上に“ <i>Soerat Dari Djepang</i> ”(邦題:「日本からの手紙」)と題して掲載。以後、通信を掲載。
11月1日	『瓜(ママ)哇見聞記』を自費出版。
12月	天理外国語学校馬來語部を3年2学期修了にて病氣中退。
1933年12月13日	馬來語新聞、 <i>Bintang Timoer</i> 社長パラダ・ハラハブ氏、宮武宅を来訪。
1935年5月25日	<i>Ilmu Bahasa Nippon Jang Ringkas</i> (『馬來語書キ 日本語文法ノ輪郭』)を出版。
1936年2月3日	吉井タツエと結婚。
3月5日	『マレー語現代文ト方言ノ研究』を『函南』第9号附録として大阪外国語学校馬來語部南洋研究会より出版。7月20日に続編を出版。

1937年3月14日	長男テラス生まれる。
1937年8月1日	同月18日まで、大阪外語マレー語講習会の講師を勤める。
1938年5月15日	『メナンカバウ（ママ、以下同様）語文法概略』を Moehammad Noer 資料提供により編纂、財団法人明治聖徳記念学会刊、紀要第50号抜刷として出版。
5月29日	大阪、静安学社にて「メナンカバウ語とマレー語の音韻変化」と題して講演。
6月29日	『日馬小辞典』(<i>Kamoes Bahasa Nippon-Indonésia</i>)を岡崎屋書店より出版。
10月10日	『マレー語新語辞典』を大阪外国語学校馬來語部南洋研究会より出版。
10月12日	『ジャバ語文法概略』を K. Wirojosaksono 資料提供により編纂、出版。
10月	『世界知識』10月号に「蘭印新聞の見た張鼓峰事件」を寄稿。以後、1942年にかけて、同誌にインドネシアの政治・経済・文化の動向についてを主としてマレー語新聞 <i>Pemandangan, Soeara Oemoem, Sinar Selatan, Pandji Poestaka, Doenia Dagang, Tjahaja Timoer</i> 等の諸紙からのニュースを紹介。
1939年5月12日	『南洋文学』を弘文堂書房より出版。
1941年1月	『標準馬來語大辞典』の執筆に着手する。
4月	日本工業新聞社（後の産業経済新聞社）の大東亜通信課嘱託として、マレー語、支那語、英語等の新聞およびニュースの翻訳に従事。
6月2日	『最新ポケット・マレー語案内』を大阪府商業報国連盟より出版。翌1942年にかけて増補3版を重ねた。

日本におけるインドネシア語教育の先駆者－宮武正道の辞典に関する考察－

12月20日	県立奈良図書館の第160回読書会に「南洋の文化と民俗」と題して講演。
1942年2月	『コンサイス馬來語新辞典／インドネシア日本語辞典（新馬來語辞典）』（ <i>Kamoes Baroe Bahasa Indonesia-Nippon</i> ）を愛国新聞社より出版。
3月3日	同日より12週間にわたり奈良県拓殖協会主催、奈良県後援の「マレー語講習会」の講師を務める。
3月15日	『馬來語新辞典』を愛国新聞社より出版。
4月20日	日用南方語叢書(1)『大東亜語学叢刊 マレー語』を朝日新聞社より出版。
	『バヤン・ブディマン物語』を翻訳し生活社より出版。
5月5日	『インドネシア人の文化』を大同書院より出版。
6月2日	大阪朝日新聞6月2日付、紙上より「マレー語小話」を連載し始め、翌年12月28日号に及ぶ。途中タイトルが「マライ語小話」と変わり、終わりには「南洋語小話」と変わって、マライ語以外のタガログ語、西南太平洋語をも含めた。
6月30日	『ヤシノミズ ノ アジ』をカナモジ ニッポンシャより出版。
8月7日	午前8時JOBK(NHK大阪)より「南洋の童話について」を放送。
8月30日	『南洋の文化と土俗』を天理時報社より出版。
10月25日	『インドネシアの声』を左山貞雄と共著にて大和出版社より出版。
11月5日	『標準マレー語講座』Iを藺田顕家と共著にて、横浜商工会議所より出版。
11月12日	朝日新聞学芸欄に「スカルノの武士道と奴隷根性」を翻訳、14日まで3回連載。
12月25日	『標準マライ語第一歩』を青木学習堂より出版。

1943年1月25日	『標準マレー語講座』Ⅱを続刊。
1月29日	大阪朝日新聞に「大東亜式羅馬字綴」を連載。
2月5日	『高等マライ語研究—方言と新聞』を岡崎屋書店より出版。(内容的に、「メナンカバウ語文法概略」と「ジャバ語文法概略」を含む)
3月30日	『標準マレー語講座』Ⅲを続刊。
4月25日	『南洋の言語と文学』を湯川弘文社より出版。
6月20日	マライ童話集『カド爺さんの話』を土家由岐雄と共著により増進堂より発行。
7月20日	『標準馬來語大辞典』(<i>KAMOES BAHASA MELAJOE (INDONESIA) ~ NIPPONJANG LENGKAP</i>)を藺田顕家とともに編纂主任として博文館より刊行。語数10万、当時世界最大の馬來語辞典。松岡外相懇談による出版。
8月9日	大阪新聞に「マライ語になった日本語」を執筆。
9月20日	『マライ語童話集』を愛国新聞社より発行。
11月25日	バンドン高等工業学校(Technische Hoogeschool te Bandung、現バンドン工科大学)出身の建築家だったスカルノ(後のインドネシア初代大統領)が、中央参議院議長資格で来日、同日奈良訪問に際し通訳として接待した。大仏殿ではスカルノは専門的な質問を連発して、一同を感嘆させた。特に穴くぐりの柱については、その敷石が他の柱の分と質が違っている点に着眼。あの穴は、柱がずれた際、持ち上げる棒を差込むのにあけたものだと言い、その説のとおりなら、工学博士の称号を贈るべき価値があると、周囲の関係者が感嘆した。同夜、奈良ホテルにおける歓迎晩餐会の席では、知事の挨拶を通訳した。
12月12日	大阪新聞に「日本語の普及—現地での日本語についての要望」を執筆。

1944年1月15日	『インドネシヤ・パルー』を左山貞雄と共著にて湯川弘文社より出版。
7月3日	奈良県よりマレー語担当の通訳事務を委託される。
8月16日	自宅で病死する。数え年33歳。
8月25日	『最新マライ語新聞の研究』を塩出真澄編、宮武正道校閲にて愛国新聞社より出版。

宮武タツエ『宮武正道 追想』、1993年所収の「宮武正道年譜」より、パラオ語、エスペラント語以外の部分に基づき、加筆修正等を加えて筆者作成。

3 インドネシア語の辞典編纂

3-1 『日馬小辞典』

日本で初めて出版された日本語・インドネシア語辞典である『日馬小辞典』（以下、『小辞典』と略す）、『コンサイス馬來語新辞典』などの宮武による辞典の中でも、『大辞典』は、他界する前年に出版され、当時最大の語数を掲載していた。

『小辞典』は、日本で初めての日本語・インドネシア語辞典であるといわれているが、友人の樋泉莊平によれば、当時好評だったA5版の宇治武夫の馬來語の手引書の巻末にまとめた語彙集があり、それを分解することから始めたものである。それはサイズは少し小さいが1934年発行の宇治武夫、W.J.S. Poerwadarmintaの共著による *Poentja Bahasa Djepang*（マレー語による日本語初歩）であると考えられる。この本は、宮武本人の蔵書の中に、1925年5月27日に宇治武夫から宮武正道宛に献本されたものがある。巻末部分の158-221頁には日・イ辞典“Kamoes Djepang-Melajoe (Indonesia)”，221-279頁にはイ・日辞典“Kamoes Melajoe (Indonesia) - Djepang”が掲載されている。辞典という言葉を使っているが、実際には単語集である。

『小辞典』の作成経緯については、宮武の性格を物語るようなエピソードがある。この辞典が出来る前は、「辞書にない単語は続出するし、特に歯痒い思いをし

たのが、『和一英』辞典に相当する『和一馬』辞典のない事であった。そしてそれは日本中の馬來語学習者の渴望の的でもあった。³⁰樋泉たちは『馬一日』辞典を分解して即ち訳語を一つずつカードにローマ字で書き写して、このカード数千枚又は数万枚をABC順に並べて、再び、『日一馬辞典』として組立て直したら、どうだろうという話が持ち上がった。³¹この計画について拓殖大学で馬來語を教えていた宇治武夫に意見を求めた。樋泉らの直接の師である内藤にはまともに取り上げてもらえると思わず、言いそびれた。宇治からは「言葉と言うものは機械的に、逆にすれば、前の逆になると考えると、重大な誤りを犯すことになるので、止した方がいい」³²との返事があった。そして今度は宮武と話したところ、彼は次のように回答した。「何だ彼だと理屈ばかり言い合っても始まらない。兎角どんな小さなものでも、一応造って、それから次々と書き足して、語彙を殖やして行けば、その中一応まとまった物になる筈だから協力してやってみようではないか。それには「馬一日」辞典みたいな大きなものでなく、もっと小型の手引書でも分解、組立てをしてみないか？」³³という意見である。決定から毎週2,3回、樋泉は学校の帰り宮武宅に寄り、カードを数十か数百もらい、家に持ち帰ってはローマ字と日本語をそれぞれ片面ずつに書き分ける作業を続けた。宮武は次々と、ABC順にそのカードを整理していった。「そして一、二ヶ月後に一冊分厚いノートを手渡され、之が『日一馬辞典 一号です』と。(中略)厚さ2センチ余りの大学ノートに五行に一語書き写していった」。³⁴この辞典作成の動機は、本人のいうところの「にぶき良心」によるものであろう。すなわち「学問にはもとより良心がなければならぬが、にぶき良心がいいのではないか。餘りするどい良心であると、一生何ものもしでかさないうで、却って学問の為にならないのではな

³⁰ 宮武タツエ、前掲書所収の樋泉莊平「宮武正道さんを憶う」p.48。

³¹ 同上。

³² 同上、p.49。

³³ 同上。

³⁴ 同上、p.50。

いか。どうせほんたうに完成したような成績はそうあるわけではない。だから例え未完成のものでも良心には少し咎めても何かの点に一步を進めているならば、完成は後来の増補によることとして、にぶき良心でぐんぐん仕事をして行く」³⁵という考え方である。

彼は本辞典の序で次のように述べているが、特長は「生きたマレー語」を追求していることである。これは、宮武が一貫して貫いた姿勢である。

從ツテ本書ノマレー語ハ蘭領印度デ現在使ワレツツアル單語ガ主デ、古文ヤ古典ノミ使用サレル様ナ語ハ全部之ヲハプイタノデ、本文中ノ語彙ハ總テ生キタマレー語ト言イウルト思ウ。³⁶

3. 2 『コンサイス馬來語新辞典』³⁷

本辞典は、著者・宮武正道、校閲・宇治武夫、ラーデン・スジョノである。その序文では、スジョノのほかにも協力者として、Poerwadarminta、Sibrian、B.S.Yo（華僑）、Soedibijo、H. Algamarへの謝辞を掲載している。³⁸マレーシアのマレー語の辞典はあってもインドネシア語の辞典が不足しているのが、辞典作成の動機である。当時、東京外国語学校の講師であったスジョノによれば、宮武はメダン、ジャカルタ、スマラン、スラバヤ、ジョグジャカルタの新聞を購読し、その新聞から収集した単語のリストを一週間に一度送ってきた。これらの単語はどの辞典にも載っていない。確かに当時の新聞には、各地方語、オランダ語、中国語などに由来する言葉が混じっていたのであるから、辞典にないのも納得できる。ネイティブのスジョノにとっても、ときに何時間も必死に語源を考えることを余

³⁵ 同上、p.5。および注2 黒岩「語学道楽」、pp.125-126。

³⁶ 宮武正道編『日馬小辞典』、岡崎屋書店、1942年、四版、序。

³⁷ 表紙には、*Kamoes Baroe Bahasa Indonesia Nippon*、中表紙には『コンサイス馬來語新辞典』、奥付には『インドネシア日本語辞典（新馬來語辞典）』と記載がある。本稿では『コンサイス馬來語新辞典』で統一する。

³⁸ 同上、序文。

儀なくされ、まるで拷問のようであったとも回想している。³⁹スジョノは、スマトラ島の地方語でわからない単語があればGaos Mahjudinに尋ね、ポルトガル語教師のDe Pintoやオランダ語教師のHerman Abbingaにも協力してもらった。刊行は1942年2月であるが、ジャワ人でインテリのスジョノでさえも、理解できない単語が数多くあったことからしても、当時のインドネシア語がまだ未整備である状況がわかる。

3. 3 『標準馬來語大辞典』

『大辞典』は、1943年7月に発行された。執筆に着手したのは、1941年1月である。⁴⁰宮武とともに編纂を行った藺田頭家の回想では、辞典作成依頼を受け、「この大事業を完成させるには、私一人ではおぼつかない。これはぜひ宮武さんにご協力願わなければならないと考え」⁴¹、1941年2月に宮武家を訪問し編集方針、資料等に関する打ち合わせを行った。3年の期限で着手したが、依頼者から急かされて約半年早く刊行できたという。宮武によるとこの辞典は、当時「マレー語辞典中の最大なWilkinson: *A Malay-English Dictionary*⁴² (以下、*Wilkinson* と略す) を殆ど全譯したものに同書に無い新語、方言等約二萬を追加し合計約十萬を有する世界最大のマレー語辞典としたもの」⁴³である。いままで最も優れていると定評のあった*Wilkinson* より2万語多く、しかも従来どの辞典にもない新

³⁹ 1938-1942年、東京外国語学校の専任外国人教師。『東京外国語大学史』東南アジア p.1047

<http://www.tufs.ac.jp/common/archives/history.html#Southeast-Asia> および

Soebagijo I. N., *Mr. Sudjono -Mendarat dengan Pasukan Jepang di Banten 1942*, Pt Gunung Agung, 1983, pp.155-156,158.

⁴⁰ 宮武タツエ編、前掲書、p.69.

⁴¹ 同上、p.8.

⁴² Wilkinson, R.J., *A Malay-English Dictionary (Romanised)* 1932.

⁴³ 宮武正道『大東亞語学叢刊 マレー語』、朝日新聞社、1942年、p19。ここでは宮武の近刊予定のマレー語辞典二種として模範馬來語大辞典(亞州文化研究所)と馬來語新辞典(興亜協会・愛国新聞社)コンサイス型写真縮刷版の紹介がある。模範馬來語大辞典の名称が変わり、標準馬來語大辞典になったと考えられる。

語 1 万 6 千を含んでいると、菌田も宮武も口を揃えて述べている。⁴⁴この新語、方言等を多数収載していることがこの辞典の特長である。

宮武の最大の独自性は、新語等を取り入れた点にあるといえる。『マレー語現代文ト方言ノ研究』(1936)ならびにその続編では、新語や方言を収載している。続く 1938 年には『マレー語新語辞典』を発行している。そしてその集大成が『大辞典』に集約されていた。

『マレー語現代文ト方言ノ研究』は、二部に分かれており、第一部は「マレー語現代文ト方言ニ就イテ」、第二部は「マレー語新語ト方言小辞典」と題している。この第二部は平岡閏造、バチー・ビン・ウォンチ共著による『馬來-日本語字典』(1927年、以下、『字典』と略す)に記載のない、インドネシアで日常しばしば使用される新語・方言等を約 2,000 語程集めたものである。⁴⁵同年 7 月にはその続編も発行している。続編ではマレー語の新聞に出てくるオランダ語や華人マレー語を集めている。⁴⁶

宮武によれば *Wilkinson* は「マレー語の古文をやる人は是非とも備へておく必要がある」と評価しているが、『マレー語新語辞典』については、*Wilkinson* より新語がはるかに多いと述べている。⁴⁷他方、『字典』はインドネシア語の単語が随分欠けている。⁴⁸『マレー語新語辞典』は、別に *Wilkinson* の手になる *An Abridged Malay-English Dictionary* を種本とする、マレーシアで使用されているマレー語を

⁴⁴ 大阪朝日新聞 1941 年 11 月 25 日、および大阪毎日新聞奈良版、1941 年 11 月 29 日。

⁴⁵ ミヤタケ セイドウ『マレー語現代文ト方言ノ研究』、大阪外国語学校馬來語部 南洋研究会発行『閩南』第 9 号附録、1936 年、第二部の序文。ブルワダルミンタ(東京)、ラティフ(カユー・タナム)、シュアイブ(バタヴィア)、スリアディ(バタヴィア)、アルガマル(京都)、スズビヨ(大阪)の各氏に謝意を表している。スリアディ氏は、『大阪時事』(1934 年 11 月 27 日)によれば、宮武の親友でジャワのバタヴィア出身の貴族である。ジャワからの初めての留学生として、天理外国語学校で日本語を学んでいた。

⁴⁶ ミヤタケ セイドウ『続編 マレー語現代文ト方言ノ研究』、大阪外国語学校馬來語部 南洋研究会発行、1936 年 7 月、マエガキ。同じく「マエガキ」には、ブルワダルミンタ(東京外語教授)、シプリアン(大阪市外布施町)への謝辞の記載がある。

⁴⁷ 宮武正道『大東亞語学叢刊 マレー語』、朝日新聞社、1942 年、P.16。

⁴⁸ 同上、p.14。

収載している『字典』にはない、インドネシアの新聞・出版物に現れる単語を9,000語近く集めたものであると言われている。⁴⁹

次章では、まず当時のインドネシア語を取り巻く状況がどのようなものであったかを概観したうえで、宮武の特徴である「新語」とはいかなるものであったのか、その一部を具体的に分析する。

4. 独立前後におけるインドネシア語の地位と状況

4. 1 太平洋戦争前・戦中におけるインドネシア語の地位

そもそもマレーシア語もインドネシア語も、それぞれの地域において植民地支配から新たな国家としてマレーシア、インドネシア両国が独立したことにより新たな言語となったのである。したがって元は同じマレー語であった。それが、現在のマレーシアであるマレー半島においてはマレーシア語、そして現在のインドネシアにおいてはインドネシア語へとそれぞれ別の言語に変容していった。マレーシアはイギリスの植民地（英領マラヤ）だったためマレーシア語は英語の影響を受け、インドネシアのほぼ現在の領域はオランダの植民地（蘭領東インド）だったため、インドネシア語はオランダ語やジャワ語などの影響を受けている。

オランダ植民地時代は学校での教育用語は一部を除き、オランダ語あるいは地方語で行われていた。⁵⁰各地方語が使用されており、インドネシア語のような共通語がないことが、オランダの植民地支配にとってはむしろ好都合だったのである。

インドネシアでは日本軍政期の1942年12月に、オランダ語の使用が禁止される。この時期には「インドネシア語」という単語の使用が許されず「マライ語」と言っている。⁵¹当初はインドネシア語が堪能な教師がごくわずかしかいなかった

⁴⁹ 同上、p.15.

⁵⁰ 舟田京子「日本軍政によるインドネシアにおける言語政策」『佐々木重次教授退官記念論輯』、東京外国語大学インドネシア研究室・マレーシア研究室、2000年、p.94.

⁵¹ 同上、p.85.

たので、日本軍上陸当時、教師達はオランダ語あるいは地方語で授業を行っていた。学校で使用する専門用語がインドネシア語にはなく、オランダ語からインドネシア語に翻訳するのも非常に困難であった。オランダ語の単語を使用しつつ、非常に下手なインドネシア語で授業を始めていたのが現状である。⁵²

軍政当局がインドネシア語を公用語、教育用語に決定したことに対して、オランダ教育を受けた知識人の多くが、マレー語が未だ言語学的に完成していないという点から危惧を抱いていた。⁵³オランダ統治時代の1938年に第1回インドネシア語会議が開催された。インドネシア語は外来語などを取り入れることにより近代言語として完成できるという楽観的な考え方が支配的であったが、実際はあまり大きな成果をあげることができなかった。⁵⁴当時の状況について宮武は、次のように述べている。

今迄マレー語になかった語は、或はオランダ語、ジャバ語、メナンカバウ語を始め、支那語、日本語からも無造作に新語を取り入れ、翻訳態の耳ざわりのよくない表現も、ドシドシこのマレー語の中に入れ込み、急いで其の内容を豊富にしようとアセッタ結果、インドネシヤ語はさながら、ゴモクズシの如き感を呈するに至り、インドネシヤ人相互の間でも相互の理解に困難を感じしめる様な状態となつたのである。⁵⁵

さて、オランダ植民地政府に代わった日本軍政監部は、1942年10月20日、インドネシア語整備委員会を設立する。この委員会は、時代に合った文法、日常使われる単語の辞典、および適宜統一された技術と科学の専門用語辞典の作成をその任務とした。⁵⁶インドネシア語整備委員会は、ジャワの日本軍政第16軍が設立

⁵² 同上、p.94。

⁵³ 戸津正勝、カルティカ・ハンダヤニ・アンバリ「インドネシアにおける国語の形成過程—ムラユ語からインドネシア語へ—」『国士館大学教養論集』第63号、2008年3月、p.12。

⁵⁴ 同上、p.12。

⁵⁵ 宮武正道「インドネシヤ語會議」『国語運動』2巻10号、1938年、p.36。

⁵⁶ 舟田京子、前掲書、p.98。

した。第 25 軍の統治地域であるスマトラのメダンでも、1943 年 1 月 15 日にインドネシア語研究所が設立された。⁵⁷こうしたインドネシア語整備委員会とインドネシア語研究所の活動を通じて、インドネシア語の近代化は飛躍的な発展を遂げる。⁵⁸

このようなインドネシア語を取り巻く状況の中、まだインドネシア語が整備される以前の 1941 年 1 月に宮武らは『大辞典』編纂に着手しており、1943 年 7 月発行までの期間は、インドネシア語の近代化に向けて、言語開発が始まった頃とほぼ重なっている。インドネシア語が未整備な状態における辞典作成への挑戦であったといえる。

4. 2 稿本ノートと『標準馬來語大辞典』の比較分析

今回の宮武家文書の調査において『大辞典』の草稿と推定されるノートを発見した。このノートは大学ノートに「馬日新辞典」(稿本)と記載されており、9 冊ある。I A-Bisik、II Bising-Fi、III Fikir-Kapialoe、IV Kapir-Lempah、V Lempai-Oengkit、VI Oengkoer-Rennjah、VII Rennjai-Soeliwatang、VIII Soeloe-Tjeria、IX Tjerian-Zahrat、となっている。

まず宮武の辞典の特長である新語を抽出するために、*Wilkinson* の全訳に新語を加えたのが『大辞典』であると宮武が説明しているので、本稿では『大辞典』に掲載されていて、かつ *Wilkinson* には載っていない単語を新語と定義する。

4. 2. 1 新語について

今回の分析に関する説明および語句の定義は、次のとおりである。

1 紙幅の関係で『大辞典』の単語について、A から始めて 100 語を対象とする。

以下の表は、そのなかから、「4. 2. 2 新語の中で、現在も同じ綴りで使用

⁵⁷ 舟田京子、前掲書、p.100。

⁵⁸ 戸津正勝、前掲書、p.13。

されている単語」および「4. 2. 3 新語の中で、綴りに変化があっても現在使用されている単語」を抜粋したものである。

- 2 ノート、『大辞典』、*Wilkinson*、*Kamus Besar*⁵⁹の列：○ 記載あり、× 記載なし、綴りの異なる単語がある場合には、その単語を記載した。
- 3 新語等：『大辞典』に記載されていて、*Wilkinson* に記載されていない単語に「○」を記す。蘭式と英式では一部綴り字が異なる。『大辞典』は蘭式に英式を併記している。*Wilkinson* は英式である。両者の綴り方の相違は、同一とみなす。例 英式「u」：蘭式「oe」など。
- 4 現在の使用：新語等のなかで、同じ綴りで *Kamus Besar* にも記載されている場合、現在も使用されていると定義し、「○」を記す。綴り方の旧式、新式の違いは、同一とみなす。
- 5 継続：新語であるなしは関係なく『大辞典』に掲載されており、*Kamus Besar* にも綴りに変化があったとしても掲載されている場合に継続使用されているものと定義し、「◎」を記す。
- 6 『大辞典』に記載されている意味と *Kamus Besar* に記載されている意味が全く異なる場合を除いて、同一単語と見なすことにした。単語の意味が複数ある場合に、その一つでも同じ意味の場合は、同一単語と見なす。
- 7 『大辞典』：別の綴り、別の単語、語根などの記載がある場合には下段「＝」のあとに記した。
- 8 *Kamus Besar*：『大辞典』の単語の綴りと、*Kamus Besar* に記載されている単語の綴りが異なる場合は「×○」を示し、*Kamus Besar* に記載されている単語を示した。この場合「現在の使用」は、空欄とした。「現在の使用」欄が「○」となるのは、現在も『大辞典』と同じ綴りで *Kamus Besar* に単語が掲載されている場合である。

⁵⁹ *Kamus Besar Bahasa Indonesia*, Edisi Kedua, Balai Pustaka, Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, 1995 の略。

9 語源⁶⁰：語源は『大辞典』に依拠した。

4. 2. 2 新語の中で、現在も同じ綴りで使用されている単語

単語数：6

新語等	現在の使用	継続	ノート	『大辞典』	<i>Wilkinson</i>	<i>Kamus Besar</i>	語源
○	○	◎	×	a (単価 に付)	×	○	—
○	○	◎		aben	×	○	Bali
○	○	◎		aboek =abok	×	○ abuk あり	Minangkabau
○	○	◎	×	aboi	×	○	—
○	○	◎		abortus	○	×	Dutch
○	○	◎		absurd	○	×	Dutch

(上記分析に関する説明および語句の定義 1 から 9 のとおりに、筆者作成)

⁶⁰ 『大辞典』では、語源または使用地域を示しているが、本稿では語源で統一する。

4. 2. 3 新語の中で、綴りに変化があっても現在使用されている単語

単語数：17

新語等	現在の使用	継続	ノート	『大辞典』	<i>Wilkinson</i>	<i>Kamus Besar</i>	語源
○		◎	aam	○ ='am	×	×○ am あり	Arabic
○		◎	aambeien	○	×	×○ ambeien あり	Dutch
○		◎	aandeel	○	×	×○ andil あり	Dutch
○		◎	abatoir	○ =abattoir	×	×○ abatoar あり	Dutch
○		◎	abiturient	○	×	×○ abiturien あり	Dutch
○		◎	abloer	○ =ablur/habeloer	×	×○ ablur→hablur あり	—
○		◎	×	ablok =hablok	×	×○ habluk あり	—
○		◎	abnorm	○	×	×○ abnormal あり	Dutch

○		◎	aboewan	○ =abuwan	×	×○ abuan/habuanあり	—
○		◎	aboewi	○ =abuwi/aboé	×	×○ aboi あり	—
○		◎	abonne	○	×	×○ abonemen あり	Dutch
○		◎	abracadabra	○	×	×○ abrakadabra あり	Dutch
○		◎	absces	○	×	×○ abses あり	Dutch
○		◎	absentie	○	×	×○ absensi あり	Dutch
○		◎	absoluut	○	×	×○ absolut あり	Dutch
○		◎	absorptie	○	×	×○ absorpsi あり	Dutch
○		◎	abstract	○	×	×○ abstrak あり	Dutch

(上記分析に関する説明および語句の定義 1 から 9 のとおりに、筆者作成)

以上の試験的な分析によって判明した事実を以下に列挙する。

- ・サンプルの母数は A の最初の 100 語であり、単語の語源は『大辞典』によるが、その内ジャワ語起源の意味を含む単語は、1 単語だけだった。オランダ語起源の単語は 23、アラビア語起源の単語は 32 あった。
- ・本来ならインドネシア語化されたジャワ語は多数あるはずだが、今回は新語の中にジャワ語起源の単語はなかった。

- ・新語は 39 あった。
- ・新語で綴りがそのままでも現在も使用されているのは 6 語であり、外来語または地方語由来の語源の内訳は、バリ語 1、ミナンカバウ語 1、オランダ語 2 となっている。
- ・新語では綴りが変化しているが、現在も使用されている 17 単語のうち、外来語または地方語由来の語源の内訳は、アラビア語 1、オランダ語 12 である。オランダ植民地時代を反映しているのか、オランダ語起源は多い。
- ・ノートや『大辞典』ではオランダ語起源の単語は、インドネシア語化せずに、そのままオランダ語が用いられているものも多い。その中で現代まで継続して使用されている場合には、綴り字が発音に沿う形に変化し、つまり、インドネシア語化されて残っている。上記表から見られるこの事例は以下のとおりとなる。

「ノート」 『大辞典』 → *Kamus Besar*

「aa」 → 「a」、 「ee」 → 「i」、 「oi」 → 「oa」、 「uu」 → 「u」、
例 aambeien→ambeien、 aandeel→andil、 abatoir/ abattoir→abatoar、
absoluut→absolut

単語の最後の「t」が無くなる。

例 abiturient→abiturien

「nn」 → 「n」

例 abonne→abonemen

「sc」 → 「s」

例 absces→abses

「tie」→「si」

例 absentie→absensi、absorptie→absorpsi

文末の「ct」→「k」

例 abstract→abstrak

これらの綴りの変化は、基本的には現代のインドネシア語の発音に従って、表記されている。

- ・新語で現在使われなくなったのは、16 単語である。外来語または地方語由来の単語は、ラテン語 2、オランダ語 8、アラビア語 4、サンスクリット語 1、フランス語 1 である。

以上のように列記した結果は、紙幅の関係もありサンプルを少数に限定したため、新語の一側面を反映しているに過ぎないともいえよう。しかしながら今回の分析において、新語の割合は全体の 4 割近く（100 語中 39 単語）に上った。新語のうちそのままの綴りもしくは綴りに多少の変化があっても現在も使われているのは、その半分強（23 単語）を占める。

5. 終わりに

インドネシア語の草創期にあって現地の新聞を中心に単語を集めて、かつインドネシアに特化した辞典を編纂したことは、きわめて挑戦的な試みであり、上記分析からもその後のわが国におけるインドネシア語教育・研究の発展に大きく貢献したといえる。この辞典はすでに時代遅れとなっているとの指摘もあるが、⁶¹

⁶¹ John M. Echols、前掲文、p.19。

継続して現在まで使用されている単語は決して少なくない。この辞典に拠れば、インドネシア語草創期の状況がよく理解されるし、インドネシア語の現代への変遷を確認できることから、その現代的意義は十分あるといえよう。言葉は生きているから変化していくのは当然だが、インドネシア語が近代的言語として整備発展されていくより前に、外来語や地方語を新語として積極的に取り入れ、世界最大の語数を誇る辞典が日本で発行されたことは高い評価に値する。

外来語について宮武は、1942年の著書の中で次のように述べている。

現在のマレー語は外来語が非常に多い。それは海峡の影響を受けてアラビア語の借用が多い他に、回教渡来前に於てヒンズー教時代を経験したからその時に印度方面の言葉が多く入って来た爲である。又セイロン島のタミール人の苦力が南洋で働いてみたり華僑等の関係で、タミール語や支那語も澤山入つてゐる。近世に入って歐洲人の渡来と共に歐洲語が移入され、現在東印の新聞等は和蘭語がベラボウに多いから、和蘭語の知識なしには到底判讀出来ないまでになつてゐる。現在に於ける東印のマレー語中和蘭語を除いて外來語の移入数の順位は、アラビア語、梵語、ペルシヤ語、タミール語、ポルトガル語、支那語（華語）、英語、スペイン語其他である。

現在使用されてゐる近代東印マレー語はジャバ語やスマトラのメナンカバウ方言其他各地の土語や方言などを多く混入してゐるから、正式のマレー語の知識以外に和蘭語、ジャバ語、メナンカバウ方言、バタビヤ（ママ）方言等に関する多少の知識を必要とする。⁶²

実際に、今回の少ないサンプルの中でも、オランダ語起源やアラビア語起源の単語が割合多く入っていた。インドネシア語発展過程においては、地方語と外来

⁶² 宮武正道 『大東亞語学叢刊 マレー語』朝日新聞社、1942年、p.7。

語の役割の重要性が指摘されている。⁶³つまりその基礎となったマレー語の他に、地方語と外来語が浸透してインドネシア語化され、一つの言語・インドネシア語を形成しているのである。今回はインドネシア語の形成期以前に当たる時期に、果敢に新語を取り入れた辞典を作成した宮武正道に焦点をあて、新語とはどのようなものであるかを考察した。

今後の課題としては、ノートと辞典の比較照合を行うこと、さらに多くの単語の分析を試みること、綴りの変化の仕方について、何らかの法則性があるのかを詳細に考察することが必要であると考えている。

謝辞

本論文執筆に当たって、まず宮武正道氏長男テラス氏が、筆者のインタビューに快く応じ、正道氏の思い出を語られるとともに、彼に関わる稀覯本を提供してくださった。奈良市史料保存館及び同館職員桑原文子氏は、宮武家文書閲覧について最大限の便宜を図ってくださった。最後に東京外国語大学図書館溝口真澄氏は、戦後同図書館に移管された多数の宮武正道蔵書について、詳細なリストを提示されるとともに、図書閲覧に便宜を図ってくださった。皆様に厚く謝意を表したい。

なお筆者は、宮武の辞典編纂に関してだけでなく、上記文書に残された正道氏の手になる邦文、インドネシア文の言説を精査し、その研究成果を近く上梓することを計画している。

⁶³ トルセノ A.S. 「インドネシア語発展に寄与したジャワ語の社会的背景の一考察」『拓殖大学論集』第108号、1976年、p.218。